



TITLE:

内陸アフリカの論理 - 内的フロンティア世界としてのアフリカ -

AUTHOR(S):

掛谷, 誠; 山田, 勇

CITATION:

掛谷, 誠 ...[et al]. 内陸アフリカの論理 - 内的フロンティア世界としてのアフリカ -. 重点領域研究総合的地域研究成果報告書シリーズ : 総合的地域研究の手法確立 : 世界と地域の共存のパラダイムを求めて 1996, 22: 53-69

ISSUE DATE:

1996-10-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/187610>

RIGHT:

内陸アフリカの論理－内的フロンティア世界としてのアフリカー

掛 谷 誠

1. はじめに

「内陸アフリカ」とはどこか。いわゆる「外文明」の影響が比較的少なかった内陸部という程度のイメージであるが、私がこれから話す範囲が内陸アフリカであると考えてほしい。

「内的フロンティア世界」というような捉え方は、1990年に京都大学へ移って来てから考え始めたことだ。東南アジア研究センターと共同で地域間研究を進める過程で、このような発想が生まれ、同じ頃にアメリカの人類学者コピトフの「アフリカン・フロンティア」という本から強い刺激を受けた(Kopytoff, 1987)。そして、私自身がアフリカで続けてきたフィールドワークの中で気にかかっていたことが、この「内的フロンティア世界」と深く関わっているのではないかと考え始めた。

私は以前に、ほぼ19世紀に至るまで外文明の強い影響を受けることがなかったアフリカ内陸部は、「多彩な風土に生きる諸民族が、同化と分化の二側面を含みつつ住み分け、流動的な共存関係を展開する空間」であるという考えを提示した(掛谷, 1994)。だが、なぜそういう空間であり続けてきたのかという疑問は残っていた。

東南アジア研究センターにおける地域研究は、世界単位論をその一つのピークとしつつ、様々なキーワードに集約される多彩な成果をあげている。「内世界と外文明」「小人口世界」「フロンティア世界」「周辺性」「海域世界」「圏とネットワーク」等々、キラ星のごとくキーワードが生み出されてきた。その言葉から受けるイメージは、アフリカと重なるものが多い。例えば「フロンティア世界」を中心に据えて、「内世界」「小人口世界」「周辺性」というキーワードを組み合わせれば、私が「内陸アフリカの地域性の生成と展開」で考えていた地域特性と照応するように思われる。

それらのキーワードで描き出される東南アジアのイメージは、例えば次のようになる。東南アジアは、中国とインドという、大人口・大文明地帯の周辺にある、森の卓越した小人口世界であり、その内世界は「フロンティアの形成と成熟の社会過程を経て、実質的な中身」を与えられ、「無限フロンティア形成」の論理に支えられてきた地域である。それは重層性を持った文明流入によるフロンティア形成という大きな特徴をもつ(矢野, 1990)。また、東南アジアのフロンティア論の背後には、精緻な実態調査に基づく開拓農民や開拓空間についての考察(田中, 1990, 1993など)もあり、あるいはフロンティアとしての都市という形で展開される考察も

ある。このような東南アジアにおけるフロンティア論を頭の片隅に置きながらアフリカについて考えていきたい。

2. 低人口密度の大陸

アフリカでは「低人口密度の大陸世界」という事実を押さえておく必要がある。20世紀以前の人口については推定に頼るしかないが、サハラ以南の人口は、経済史家のマンロー(1987)によれば、1850年の場合、マキシマムで1億2千万人余り、ミニマムで7千万人弱と推定できるという。人口密度では㎢あたり3～6人の間におさまるだろう。坪内さん(1993)がまとめられた資料によると、1850年当時、東南アジアでは㎢あたり10人、中国で100人、インド(バングラデシュ、パキスタンを含む)が50人、ヨーロッパが45人、日本が90人という人口密度の値が出ている。つまりアフリカの人口密度は、小人口世界である東南アジアの半分程度ということになる。それらの人々が、熱帯多雨林からサバンナ、砂漠に至る多様で広大な植生帯の中で暮らしてきた。また、ツェツェバエの分布域に象徴的に示されているように(図1)、ヒトや家畜の生存をおびやかす風土病や病原体の問題も大きい。それらがアフリカの生態史を考える時の舞台装置として極めて重要な特性になるだろう。

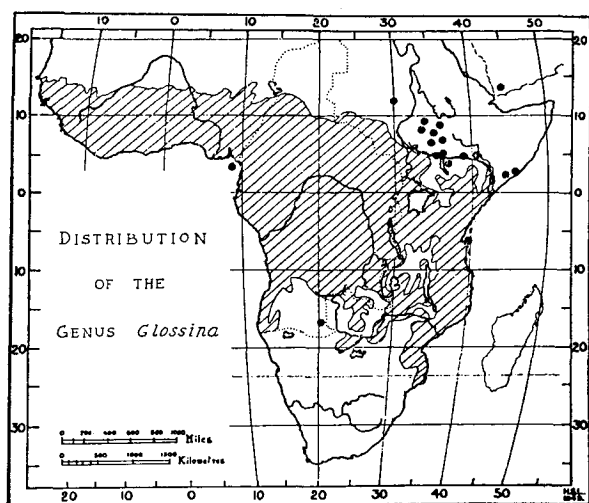


図1 ツェツェバエの分布域(黒丸は孤立した小分布域を示す)(Nash, 1969, p 45)

コナー(1993)は『熱帯アフリカの都市化と国家形成』という本で8つの地域を取り上げている(図2)。それは何らかの形で超越的な枠組み、国家、あるいは小さな地域を越えて同質化していく文明的な地域だった。しかしアフリカ内陸部は、そのような特性の稀薄な地域であるといってよい。私も市川さんも、これまで、超越的な枠組みを作ってこなかった人達に深い関心を持ち、なぜ超越的な枠組み

に人は頼らねばならないのかという問題について考えてきた。文明化や発展に関心を持つ人の問いかけとは逆転している面がある。

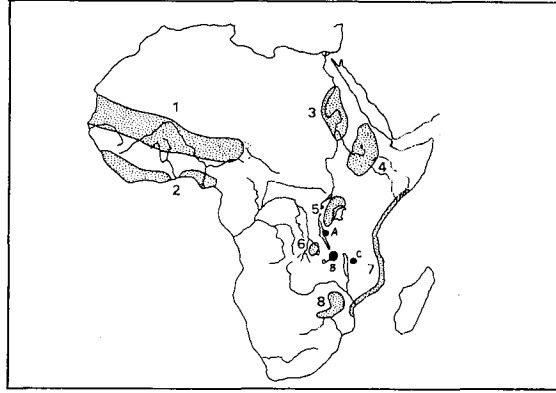


図2 G. コナーが『熱帯アフリカの都市化と国家形成』で取り上げた諸地域と報告者の調査地(コナー, 1993, p 37)

1. 西アフリカ・サバンナ 2. 西アフリカ森林地域 3. ナイル川中流域
4. エチオピア高地 5. 湖沼地域 6. ウベンバ凹地 7. 東アフリカ海岸
8. ジンバブウェ高原
- A. トングウェ B. ベンバ C. マテンゴ

今日の話では超越的な枠組みを志向しなかった人々を基本的な対象とするが、アフリカ内陸部に大きな帝国を作った例がないわけではない。ウベンバ凹地(図2参照)では18~19世紀頃にルバ帝国が形成されている。それは、殆ど外側からの影響なしに、アフリカ内部で自生的に形成された帝国だと言われている。そのような地域も視野に入れながら、内陸アフリカの論理を考えてみたいのだが、タンザニアのタンガニカ湖畔から東側に広がる山地帯に住むトングウェ、内陸国ザンビアの北部に住むベンバ、タンザニアの西南部に住むマテンゴという三つの民族集団の調査体験を基礎とし、それらの民族に共通する特性を軸にして話を進めたい。

3. 民族誌的なパースペクティブ

市川さんも指摘されたが、アフリカの歴史の基層部には「移動と移住」という特性が潜んでいるように思われる。これらの特性については私自身の調査体験の中でも強く印象づけられた。アフリカでは様々な民族(あるいは部族)が多様な暮らしを展開をしているが、その中でも人々の頻繁な移動や移住は、それぞれの民族の個別性を越えて、かなり共通した特徴と考えることができる。それは、遊動生活を基本とする狩猟採集民や牧畜民のみならず、多くの農民社会にも見い出すことができる。東南アジアのフロンティア論の中で、モーバイル・ペザント(動きまわる農民)について語られているが、アフリカでも、農耕民は半定住、半遊動の民であると考えた方が実状に合う。特に焼畑農耕民は、文字どおりモーバイル・カルティベーター、

あるいはノマディック・カルティベーターと位置付けることが可能だ。

モバイル・ペザント、あるいはモバイル・カルティベーターの一例として、チテメネ・システムという特異な焼畑農耕を行うベンバを挙げることができる。チテメネ・システムは焼畑農耕の中でも集約性が高い。彼らは原則として疎開林の木を根元から伐り倒さずに枝のみを伐採し、乾燥した枝葉を中心部に集めて火を放って焼畑にする。シコクビエを主作物とする焼畑は毎年開墾され、集落の近辺に焼畑適地が少なくなると、村から歩いて1～2時間程度の距離を隔てた疎開林に出造り小屋を建て、ほぼ半年間そこに移り住んで開墾する。しかし彼らとの会話から、村落内での社会的な葛藤を回避するために、出造り小屋に移る場合も多いということがわかった。出造りのために村から離れて住むということで、大義名分が立つのだ。村内での社会的なコンフリクトと出作り耕作とは、かなり強く連動している場合がある。

村落内の葛藤から村が分裂するケースもある。私の調査体験でも、村が分裂して、消滅した例を挙げることができる。村落自体が一定の年限の後に移動するのは、ごく一般的である。焼畑適地がなくなるというエコロジカルな条件もあるが、村全体が移動するのは、例えば村長の死を契機にするような場合などが多い。ベンバについては、1930年代にイギリスの人類学者のリチャードが調査しているが、彼女の調査した村を再確認して、その後の変化をたどることは難しいと言われている(Moore and Vaughan, 1994)。

移動は頻繁であり、しかも極めて気軽に移って行くように見える。タンザニアの焼畑農耕民のトングウェは、ムワミと呼ばれる首長を中心とした父系の親族集団のゆるやかな連合体からなる社会を作っている。彼らは、小さい集落が互いに距離を隔てて存在するという居住形態をとっている。その集落間をつなぐのは人々の行き来である。トングウェには「テンベア」という行動様式を認めることができ。「テンベア」は、スワヒリ語で「人の移動」を意味する言葉だが、散歩から長期にわたる移動まで幅広い内容を含んでいる。テンベアに出かけたトングウェは、気ままに他の集落に長期間滞在することもあり、そのまま住み着いてしまった例もある。

「テンベア」はトングウェ社会の特性を反映する行動様式である。トングウェ社会には、客人を受け入れる洗練されたホスピタリティの文化が発達している。しかし一方で、村の中での親族関係のもつれや、呪われた、呪われそうだということで村を出ていく場合もある。それは、村から人が出ていかざるをえない押し出し要因も強く内在させた社会だ。

最近ではマテンゴを対象に調査をしている。彼らは焼畑農耕民ではない。開墾のときには焼畑を使うが、基本的には非常に集約度の高いピット(掘り穴)耕作という特異な農耕を営んで

いる。斜面地の草地を刈って井桁状に草を並べ、井桁の間の土を掘り、その土を草の上にかぶせて畝を作る。遠くから見れば蜂の巣のような畑である。そこで、インゲンマメとトウモロコシをセットにして、2年で1サイクルの農耕を行う。彼らも疎開林帯に居住する人々だが、これまで私が調査してきた民族と全く違う農耕様式をもっていた。

マテングは1800年代中頃にピット耕作を始めている。元々は小規模な集団が分散して住んでいたと言われている。1830年代頃に南方からゴニの進攻があった。南アフリカではズールー王国が1800年代初頭に勃興してくる。ズールーから派生したゴニは好戦的な集団で、彼らが北へ攻めのぼって来るのを避け、山地に退避したマテングが、ピット耕作を始めたのである。彼らは、歴史的なある時点の条件下で、マテング・ピットという集約的な農法を発達させてきた。

ゴニの侵入の時代が過ぎパックス・ブリタニカの時代になると、疎開林を次々に開墾し、新しい開拓村を形成していった。開墾時には焼畑では耕地を広げていくが、その後に、ピット農法に切り換えて生活を維持していく。定住性と強く結びつくような集約型の農法も移動や移住と強く結びついているのである。これらの事例を踏まえれば、アフリカの農耕社会は、むしろ移動と移住を常態とした流動性の高い社会と考えるべきだろう。トングウェのテンベアも、ベンバの消えた村も、エコロジカルな基盤と共に、移動と移住を促す構造を持つ社会の反映であると考えられる。

最近私は、移動・移住をベースにする暮らし方を「エキステンシブな生活様式」と表現している。それは移動性に支えられ、広く薄く環境を利用する生業を基本にした生活である。農耕民といえども、狩猟、採集、漁撈をセットとしてもっている。基本的には自然利用のゼネラリストと考えるべきだろう。自給のレベルを大幅に超えることのない生産指向を保持し、生産されたものは、村の中で、あるいは村を超えて平準化していく。物財が偏在することを避けるかのような分配・消費のメカニズムがある。それは、「最小生計努力」の傾向性と「平準化のメカニズム」を備えた生計経済を特徴としているといっていよい。政治的な統合度の低いトングウェの社会も、かつては大きな王国を形成したことで知られるベンバの場合も、村レベルで見る限り非常によく似た生計経済の特徴をもつ。基本的にこれらの社会は、差異の累積化を原動力とした拡大型の経済よりも、差異を平準化し、安定した生計経済を維持する指向を強く持った社会なのだ。

それは擬制的なものも含めたイデオムとしてのキンシップ(親族)の絆と、その内部での互酬性と共存の論理を基礎とする社会なのである。しかし、それは「お人好しの住む社会」という意味ではない。むしろ、このような基本的な論理から逸脱する者は、例えば精霊や祖先霊

からの怒りや懲罰を受ける。あるいは人々の間の妬み、恨みに起因する呪いの標的になる。そういうものへの「恐れ」によって支えられている社会という側面をもつ。集住がもたらす社会的なテンションを回避し、分散的な居住を促すというモチベーションがある。人々の集住という求心的な傾向性よりも、移動と分散を常態とした、遠心的な傾向性をベースにもつということだ。より規模の小さな親族集団を基礎とした分節的な社会、セグメンタリーな傾向性をもつ社会である。それが、エキстенシブな生活様式を基礎とする社会の特長である。

北部タンザニアのエアシ湖畔域にある開拓村のマンゴーラは、いわゆる多部族混住地域だ。ここは和崎さんが調査されてきた。和崎さんは、民族社会に根をもつと同時に、多くの民族あるいは部族をつなぎ、地域社会の形成力として働く組織化の原理(「チャマ」)や、移動をする習性としての行動様式(テンベア)について考察している(和崎、1996 a、1996 b)。1930年代からマンゴーラ村に開拓民が移住してきたが、和崎さんが調査を進めた1960年代には、農耕、農牧、牧畜、狩猟採集という、異なった生業をもつ民族が混住し、農耕民について言えば、バントゥ系の17部族に由来する出自をもっていたという。日野さんの話にもあったように、農耕民は「スワヒリ」という共通した集団意識を持っていた。しかし一方で、彼らはそれぞれの出身の部族の意識、部族としての感情ももち、村の中では部族ごとに住み分けて暮らしている状況があった。スワヒリという集団意識については、重層的な要因が関係しているが、例えば同じ呪薬(ダワ)の威力を信奉する結社(「チャマ」)の重要性が和崎さんによって指摘されている。それは元々スクマ系の民族に由来する結社だが、マンゴーラ村では、元々の民族、部族の枠を越えた集団構成をもち、スワヒリとしての凝集性を内側から支えている。

マンゴーラ村の農民は、自らの出生地を離れ、各地を遍歴し、その間にスワヒリ文化やスワヒリ意識を身につけた人々である。この遍歴は、スワヒリ語で「テンベア」と呼ばれる。それはトングウェ社会での人の移動と共通する行動様式である。「テンベア」は部族社会に深く根ざした行動様式であると共に、一方で民族の混住化や結合をもたらしてもいる。

マンゴーラ村の事例は、国民国家形成という流れの中での一つの動きではあるが、その動き自体は、アフリカの民族社会の形成についても非常に示唆的である。これまで私が調査をした民族は、ほとんどがここ150年から300年の間に、異なる多民族が集まって一つの民族を形成してきた歴史をもつ。トングウェは、ほぼ150年から200年前に、タンガニカ湖の対岸域に住むタブアやホロホロ、北方に住むハ、南方のフィパやベンバなどの諸民族が移住し、混住して形成されたという伝承をもっている。マテングも、他地域に住む諸民族が現在の地に移住して形成された民族であり、出自を異にする父系の親族集団が居住地を住み分け、ゆるやかな連合を

保っていた。しかし19世紀の中頃に、南方から侵入してきたンゴニに対抗する過程で、首長制を発展させていったという。ルバ帝国の後裔であるとする伝承をもつベンバ王国も、約250年前に現在の地に移住して、形成されてきた。いずれの民族の場合も、無人地帯に移住して形成されたとする伝承は共通している。それらは、天地開闢以来、その地に住み、民族としてのまとまりを形成してきた社会ではない。内陸アフリカの多くの民族社会は、むしろ新しく作られてきた社会で、それも流動的な人々が離合集散する中で形成されてきた社会である。

4. 内陸アフリカの歴史

このような社会的特徴の淵源の一つは、市川さんも取り上げられたバントゥ拡大の歴史にあるように思われる。「Chifumbaze complex」という、考古学者のフィリップソンが命名したタームがある。ビクトリア湖の北部から南アフリカまで、非常に共通した特徴をもつ遺物がある。それは鉄器、農耕、土器の文化複合で、紀元前の2～3世紀から紀元4世紀頃にわたって広く

展開しており、バントゥの拡大と結びついた遺跡群だと考えられている(図3)。一番古い遺跡は、紀元前2、3世紀で、ビクトリア湖北岸のウレウェにある。アフリカ南端域には紀元4世紀末に達していると言われている。

ルアラバ河(コンゴ河)の上流域にあるウペンバ凹地はルバ帝国の領域と重なる。Chifumbaze complexの分布内に位置しており、この地域にもバントゥの移動があったことになる。内陸部アフリカでは、古い時代から現在に至るまでの、編年的なデータ収集が可能な考古遺跡はほとんどない。ルバは中でも、長期間にわたって編年が可能な例外的な地域と言われている。ルバの編年史を見ると、Chifumbaze complexが4世紀頃までにこの地域に展開し、5世紀に Kamil-

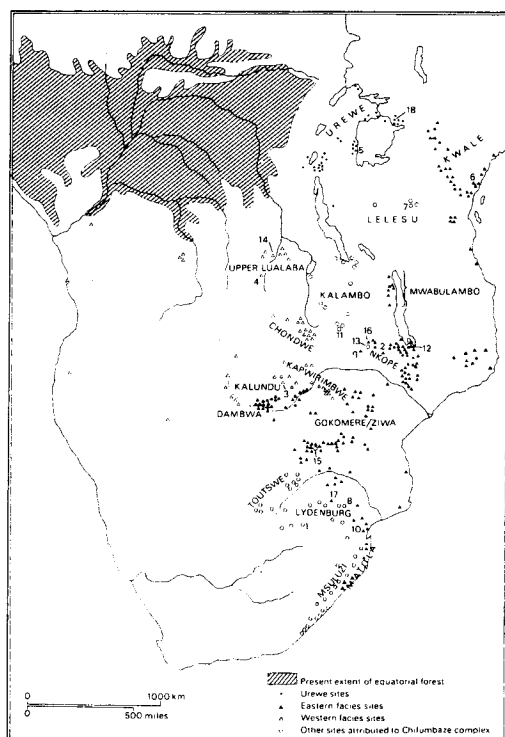


図3 Chifumbaze complex の分布
(Phillipson, 1993, p. 191)

ambian と呼ばれる鉄器時代が始まる。8 世紀末には、Ancient Kisalian tradition の時代になり、社会的な階層化の萌芽が見られるという。墓の発掘から、祭祀用の鉄斧、鉄床、鉄製の槍、銅製の腕輪などが発見されている。

このウペンバ凹地で帝国という超越的な枠組みが形成されていく。そこは森林とサバンナのモザイク地帯であり、オープングラスランド、疎開林へと連なっていく地域だ。このウペンバ凹地をはじめ、ザンベジ川上流、カフエ流域、そして、ムウェル湖に流れる川沿いに展開するフラッドプレーンなど、河川流域のフラッドプレーンが、超越的な社会体制を作っていく基盤となっている。そこでは同時に塩や鉄・銅などの重要な資源が分布しているが、特に有名なコッパーベルトがこのあたりを通っている。銅と鉄と塩という資源の分布と王国や帝国の形成との密接な関係が窺われる。ウペンバ凹地には小さな湖や沼が連なっており、狩猟、漁撈、農耕を組み合わせ、比較的高い人口密度が保持されていたようだ。このような環境を制御していくために、ある種の共同労働と、それを管理するシステムが出現する。銅、鉄、塩、乾燥魚などの域内交易の中心地でもあり、このような条件のもとで、社会体制の展開があったと考えられる。

それが特に明確に現れてくるのは、11 世紀の Classic Kisalian tradition の頃である。銅の生産が活発化し、その域内で装飾品や威信財が流通し始める。ルバの中心地から 200km 離れたコッパーベルトとの交易が本格的になってきた。そして 14 世紀末の Kabambian tradition の頃には、十字型の銅の鋳造物(インゴット)が出てくる。小型、均一、そして定型化したインゴットは、貨幣として使われていたのだろう。15 世紀にはインゴットが急増していることから、域内での交易が大きく拡大してきたと考えられている。14 世紀以降には、コッパーベルトが二つの交易システムの結節点となった。一つは、北の熱帯多雨林の辺縁域の特産物であるラフィア布の交易と結びついた交易システムであり、もう一つは、南のザンベジ河の周辺域に広がる交易圏と結びついたシステムである。それは、さらにジンバブエ交易網にもつながっていったと言われている。このような域内交易の拡大と共に帝国化が進み、ついに 18 世紀には広大なルバ帝国が成立する。

11 世紀の銅生産が拡大していった Classic Kisalian tradition の時期に、この地域からバントゥが東方へ移住していった。この東に行った人の流れが、ザンビア西部やマラウィで王国形成に関わってきたと言われている。こうした王国や帝国の盛衰は、新たな移住の波をつくりだし、多くのフロンティア型の社会を創出させていった。

サバンナの帝国として有名なルバは、交易や生産の背景と共に、分節的なセグメンテーショ

ンを常態とする社会の枠組みを変える文化的装置、あるいは社会的装置を創出している。それはバンブージェという秘密結社であった。リネージの長に当たる人々が、リネージやクランを超えて秘密結社を作り、そのシステムが王権を支えていく。この秘密結社が、セグメンタリーな傾向性を制御してきた。ローカル・プリーストが「聖なる王」に転化するような文化装置、儀礼装置も付け加えながら、大帝国を形成していく(Reefe, 1981)。交易や生産的な背景の他に、文化的装置、社会的装置の創出によってルバ帝国が巨大化していった。その影響は、周辺地域に及び、各地に王国が形成されていった。しかし、これらの王国は、王位の後継者争いなどを契機としてセグメント化し、衰亡していく場合が多かった。

5. 内的フロンティア世界

アフリカ内陸部では10世紀頃までバントゥの大移動に由来する移動拡散の時期であった。10世紀以降は人口分布の密度化の時代が続いていく。それはフェーズを変えながらも、移動と拡散を生みだし続けてきた。17世紀までに、域内交易と集権化が進んだが、一方で内部的なセグメンテーションを誘発し、それが移動拡散を促す時代であったろう。18世紀以降には大帝国の形成と、それに伴う移動拡散の時代であった。19世紀になれば、いわゆる長距離交易の時代になる。東方からはアラブが、西方からはポルトガルが奴隷や象牙を求めて進出し、大陸を横断するような交易ルートが確立した。あるいは南からのゴニの進攻があり、他民族の侵入に伴う移住拡散の時代でもある。

アフリカという低人口密度の大陸世界は、移動と移住を生み出す構造をもった社会を育んできた。それは、エキстенシブな生活様式と連動しており、強い分節化の傾向性を内包する社会的、政治的な構造とも結びついている。人々は生業の適地を求めて移動する。テンベアの心に促されるままに、遍歴を重ねる人も多い。ときに、干ばつや飢餓、あるいは疫病のゆえに、移動や移住を余儀なくされることもある。多くの民族社会は、即位儀礼などによって聖性を付与された首長や王に収斂していく集権性と、親族組織に基礎をおき、その成員間の潜在的な平等性を求める傾向性とのバランスの上に成立している(掛谷、1993、1994)。このようなバランスが崩れれば内部集団は分裂し、一部の集団は、その社会からの離脱を余儀なくされる。ときに、積極的に新天地を求めて移住していく。ウィッチクラフトから逃れ、あるいはウィッチクラフトの嫌疑のゆえに村を追われる人もいる。そのような人々は、民族社会の辺縁部に広がるフロンティア、つまり人口の稀薄地帯や政治的な空白地帯に移住していく。

内陸アフリカは、このような基本的な条件の下で、大小さまざまな水玉模様にたとえること

ができる流動的なポリティが、消えたり現れたりする歴史を刻んできた。それぞれの社会は、共通したバントゥ的な特性をもち、移動や分散の過程ではイノベーションも含め、バラエティを持ったものが出逢い、その文化要素を再編しながら、新たなフロンティア社会を形成してきたのだろう。

一部の地域では、ルバ帝国やザンベジ川のフラッドプレーンに展開したロジ帝国、大西洋岸との長距離交易で栄えたルンダ王国のような大規模な王国が点在した。だが内陸部のアフリカの基本的な流れは、移動と分散を繰り返し、それを常態とするような社会だ。最も基層的で広い地域を覆っていたのは、より小さな政体、ポリティを温存する社会である。それは基本的にはアフリカ大陸で自生的な形で展開して歴史であり、内側に広がったフロンティアを前提とした歴史だったのではないか。その意味で内陸アフリカの世界は「内的フロンティアの世界」と位置付けることができるだろう。

〔引用文献〕

- コナー G. 1993. 『熱帯アフリカの都市化と国家形成』(近藤義郎・河合信和訳)河出書房新社.
- 掛谷 誠. 1993. 「ミオンボ林の農耕民」『アフリカ研究一人・ことば・文化』(赤阪・日野・宮本編)世界思想社. pp. 18-30.
- 掛谷 誠. 1994. 「アフリカ」『講座 現代の地域研究二 世界単位論』(矢野 暢編)弘文堂. pp. 261-279.
- Kopytoff I. 1987. *The African Frontier*, Indiana University Press.
- マンロー J. F. 1987. 『アフリカ経済史』(北川勝彦訳)、ミネルバ書房.
- Moore, H. L. & Vaughan, M., *Cutting Down Trees: Gender, Nutrition, and Agricultural Change in the Northern Province of Zambia, 1890-1990*. James Curry.
- Nash, T. A. M., 1969. *Africa's Bane: The Tsetse Fly*. Collins.
- Phillipson, D. W., 1993. *African Archaeology* (2nd Edition). Cambridge University Press.
- 田中耕司. 1990. 「フロンティアとしての開拓空間」『講座 東南アジア学—— 東南アジア学の手法』(矢野暢編)弘文堂. pp. 72-90.
- 田中耕司. 1993. 「フロンティア社会の変容」『講座 現代の地域研究四 地域研究と「発展」の論理』(矢野暢編)弘文堂. pp. 117-140.

- Reefe, T. Q., 1981. *The Rainbow and the King*, University of California Press.
- 坪内良博. 1993. 「地域発展の固有論理」『総合的地域研究』創刊準備号. pp. 11-13.
- 和崎洋一. 1966a. 「東アフリカの地域社会における部族の問題」『アフリカ研究』第3号.
pp. 65-85.
- 和崎洋一. 1966b. 「Mangola 村におけるBantu 系農耕民の部族間の関係について」
『人間-人類学的研究』中央公論社. pp. 549-565.
- 矢野 暢. 1990. 「総説「地域像」を求めて」『講座 東南アジア学- 東南アジア学の手法』
(矢野暢編)弘文堂. pp. 1-30.

コメント

山 田 勇

アフリカと東南アジアを比較する上での問題点を述べておきたい。まず一つには、地理的、歴史的なスケールの違いがある。生態資源量の差でも、アジアとアフリカは対比的に比較できる。アフリカ大陸は一つのまとまりと捉えてもいいが、その地図を例えば東南アジアに当てはめれば、インドも中東も入ってしまう程の非常に広大なスケールを持つ。このスケールのまま東南アジアと比較するのでは、整合性が非常に難しい。これらのことを認識した上で比較しなければ、議論は噛み合わないものになるだろう。アフリカの歴史的なスケールの話は確かに説得性があり、歴史的事実に相違ないのだろう。だが、それだけではないようなものがあり、そこが面白いのではないかという印象を受けた。

東南アジアのフロンティア世界の一つの例を比較の意味で出してみたい。ボルネオは世界第三の大きさを持つ島で、資源量も世界で最も多い島となっている。この大きさは、アフリカで言えばスワヒリの世界に相当すると思う。サラワクのルジャン川の下流から上流にかけて廻り、その川沿いに人や森の状況が変わっていく様子を調査してきた。乾燥地を調査されている方は乾燥地が一番いいと思われるようだが、森林を調査してきた我々としては、乾燥地は地の果ての荒れ地のような印象を受ける。熱帯多雨林は全てが濃緑の世界で、資源量も非常に豊富だ。熱帯多雨林の木材は、世界の森林の中でも東南アジアが一番だと思う。

サラワクのルジャン川河口から木材が日本などへ出荷されている。最近は製材所ができ、半

分くらいは製材して出せるようになった。木材は上流からバージを使って一度に数百本が下ってくる。少し上流に行くとロングハウスが建てられており、そのうしろでは焼き畑による陸稲栽培が行われていた。中流にあるカピットはかつては小さな村落だったが、客を乗せた船の停泊港になりいまでは町になっている。その上流には川沿いに陸稲を作る焼き畑があり、奥はずっと森林になっている状況だ。カピットから約4時間、川を遡ったブラガ村がある。この上流でダムを作る計画がある。ここにリゾートを作って世界最大のダムを作ろうという、少なくともマレーシアでは最大のプロジェクトである。水位が200m上がり、上流に住む5000人位の村が全て水没することから問題にはなっているが、政府は強引に押し切ろうとしている。

さらにこの上流域に木材の伐採現場がある。飯場があり、そこでは巨大なローリー等の機械が、山から降りて来た材をバージに載せて下流へ送る。サラワクは色々と批判されているが、私が見た限りはしっかりと管理されていたと思う。伐採された木材には全てカードが付けられチェックされていた。これに森林局の印がないと下へ送れないシステムになっている。上流域はコンセッションに分割され、さらにブロックに分割されて、その一つ一つを数カ月かけて伐採していくシステムで、インドネシアとの国境までの全てが計画の対象になっている。

伐採キャンプには教会も建てられ、自家発電ながらも全てに電気が通じている。この域内だけで一つの村が出来ているという印象を受けた。林道を大きなトラックが行き来している。中には生協もあり、約200人が生活できるような空間になっている。道は20トンクラスのブルドーザーが十数台で削って作っている。山を一つ崩して上を平らにし、ここへ通じる道路が縦横にサラワク中を駆け巡っている。これが現在見られる熱帯多雨林の、フロンティアの一つの姿である。夜になれば、専門の自動車整備工が、時には夜遅くまで重機やトラックの整備や修理をしている。インドネシア側にはここまでの設備はないが、サラワクの場合は非常に伐採会社の力が大きく、見渡せる範囲の全てを押さえている。山の中にもコンピュータが導入され材の管理や本部との連絡をとっている。こういうキャンプが一つの川の流域に20～30ある。伐採後の二次林でも植林の事業が始まっている。

そういう伐採を主体とした世界の中にも伝統社会がある。この村から更に上流に行くとプナンの村があり、その向こうはインドネシアになる。ボルネオの中でも移住というのはごく普通に行われていて、この村も約30年前にインドネシア側から移住してきた。プナンも非常によく移住する人々だが、その理由はやはりテンベア的で、移住することが楽しいという基本的な性格があるように感じる。この伝統的な村にも野菜栽培が入り、これは伐採キャンプで売られている。プナンでは、純粋な狩猟採集民は約400人とわれ、のこりの1万人は焼き畑をやりつ

つ狩猟採集をしている。湿地性以外のサゴが2種類あり、米が無くなるとこれを採集して食べるような生活だ。プナンの人や、サラワクの郊外の村では、ロタンを編んだ工芸品が交易品になっている。

ボルネオを中心とした熱帯多雨林では、フカヒレや燕の巣が中国向けの目玉商品になっている。元々燕の巣は、沿岸部の石灰岩地帯でとっていたが、最近はボルネオの山の中心地にまで人が入っている。沈香という香木の中心もボルネオである。上流でプナンやクニャの人々が集めた沈香をラウスから船で下へ降ろし、そこで集められたものはさらにシンガポールへと送られる。シンガポールにはインドネシア、マレーシア、タイ、カンボジアなどの沈香が集められており、その流通の中心となっている。香港の漢方薬屋を覗くと、東南アジア産の沈香、シナモン、キャラなど、千種類にも及ぶ生態資源が集められていた。それはアメリカ、カナダ、オーストラリア、ヨーロッパに売られるという。

つまり熱帯多雨林のフロンティア世界で採れた資源が、ポンティアナク、バンジャルマシン、サマリダという小さな港町に集められ、それがさらにジャカルタに集められ、最終的にシンガポールへ行くという仕組みになっている。沈香の島嶼部と大陸部のシェアは、島嶼部が全体の70%、大陸部が30%で、全体量は2千トンぐらいになるという。この内の70%がアラブへ行っているが、その間に入るのがバングラディッシュ商人とインドのムスリム商人である。もう一方には、日本、中国へのルートがある。この熱帯の多雨林で得られた資源が、川を通じて海へ出る。その海から更にアラブの世界、あるいは中国の世界まで行き着いている。これはまさにネットワーク化であり、非常に密な仕組みがきれいに出来上がっている。これが東南アジア世界であると言えるだろう。

一方で、沈香採取の中心は移動していく。かつてはサラワクの北にあったが、いまは東カリマンタンに中心があり、さらにイリアンへと移っている。資源が移動することによって人が動くのは、沈香だけではなく木材や他の資源でもそうだろう。資源の移動と共に人は動いて行く。それが熱帯世界の一つの常態であると考えれば、資源の大小ということを見視野に入れておく必要がある。今後の方向としては、一つ一つの資源を緻密に見て積み上げていった上で、大理論を検証していく方向が重要ではないかと考えている。

質疑応答

家島 コンゴ盆地にプランテーション・バナナが導入された時期はいつ頃だろうか。

市川 それは分からない。東アフリカには紀元1世紀に入っているとされているが、それ以前に入っていた可能性も十分ある。紀元前後にはバントゥの人々はすでに東アフリカのビクトリア湖岸に達しており、手に入れることは可能だったと思う。

家島 鉄器の導入、その利用とプランテーション・バナナの栽培との時間的な差はかなりあったのではないだろうか。

市川 最初に森林の中に入ったのは、バナナを手に入れる前だったし、鉄器を持っていたかどうかは分からない。その頃はヤムを持って行ったのだろう。ヤムは森林の中の暗い環境にあまり適していないが、川沿いに森の内部へ入って行ったことから考えれば、疎開林のように簡単ではないが、陽あたりも比較的良く栽培は可能だと思う。その他にアブラヤシもあるが、やはり漁撈が重要だったと思われる。

立本 内陸アフリカの範囲はどこになるのか。

市川 難しい質問だ。掛谷さんに聞いて下さい。

嶋田 ルバの雨量はどれくらいあるのか。

掛谷 1200mmぐらいだろう。

古川 マテンゴのピット農法はいつ頃から始まったのか。

掛谷 19世紀の中頃にこの農法を発達させた

のだろうと言われている。1830年前後ではないか。

日野 ンゴニが動いたのは。

掛谷 1830年頃で、これもバントゥ系の人々だ。

嶋田 塩はどういうものか。

掛谷 濃い塩分を含んだ沼沢地の泥を円錐形のフィルターに入れて、熱湯を注ぎ、水分を蒸発させて塩のかたまりを取り出す。

田中 移動と移住が常態だったというのは、東南アジアとよく似ている。19世紀の長距離交易は外側からのものだが、18世紀の帝国は自生的な形成で、これは内陸的な、外からの影響が無かった移動と移住だと思う。とすると、19世紀以降、移動と移住を伝統に基づいて繰り返すとすれば、その時のインセンティブは何だったのか。外からの影響が移動を更に促進したということがあるのだろう。

掛谷 そうだと思う。大激動の時代で、あの辺りの地域全体が大再編されていく時代だ。

田中 その時にモーバイル・カルティベーターは同じ農業をするのか、違う農業をするのか、東南アジアとの比較で聞いておきたい。

掛谷 様々なパターンがある。基本的にはシフティング・カルティベーションの伝統をベースにしているが、細かく分類すればかなりのバラエティがある。一方ではマテンゴのように、この150年で集約的な農耕に向かった例もある。ザンベジ河の流域では、フラッドプレーンでの集約的な農耕が展開し、

一種の官僚制が非常に発達した。パックス・ブリタニカの時代に、その官僚制のたがが緩み、エキстенシブな農業に回帰した。しかし多くの地域では環境に合った形で小さなバリエーションを作りながら、シフティング・カルティベーションを持続してきた。

古川 市川さんも掛谷さんも、移動について極めて難しく考えておられる印象がある。市川さんは乾燥化が引き金になったと言われたが、掛谷さんが言われた自然利用のゼネラリストという言葉を考えれば、十分対応していくことはできそうだ。乾燥化では、牧畜でも農耕でも色々に対応する手だてがありそうだ。乾燥化でバントゥの大スプレディングを本当に説明できるのか。もっと単純な実質的な引き金があったのではないか。奴隷商人との関係はどうだろう。サヘルから北はアラブカベルベル人の文化圏で、南の方へ奴隷を捕まえに来る。それに追われて逃げたと考えられないか。

例えば、ブラジルはアフリカの内陸部にほぼ相当するか、あるいはそれより大きいかもしれない。コロンビアとの国境近くにイエズス会が奴隷商人から逃げるインディオのための避難所を作ったことは、100～200年の間に奴隷商人が全ブラジルを隈なく探索し尽くしたことを鮮やかに示している。そういうことを考えれば、強力なるサハラのアラブやカベルベルの奴隷商人達が追いかけたためにバントゥが逃げたと考えてはどうだろうか。

市川 紀元前後から奴隷を捕まえに、森林の奥深く迄追いかけて行ったというようなことはちょっと考えられない。

古川 内陸部からいまのスワヒリ地域を奴隷が象牙を担いで行進をしていく。大量の資源を外に出すためのポーターとしての奴隷の話だが。

市川 それはバントゥが広がっていった後になる。動き始めた動機は誰にもわからない。だがその条件が整わなければ動き始められない。その条件を整えたものとして、プッシング・エフェクトとしては北から連う人達が来たというのが一つ、プリング・エフェクトとしては居住環境と似た環境が、コンゴ盆地をとりまくように東方に広がってきた。その両方が乾燥化に関係していただろうということだ。しかし移動しなくても、そこで集約的な農耕に転化すればいいという説はもちろんありうるが、そうはならなかった。それはなぜかわからない。転化した人も一部にはいたかもしれないが。

日野 そこは選択肢の問題だったのだろう。そこで別の形の生活様式を作ろうとして残った人もいれば、人口圧のプッシュで動いた人もいる。自分達の住環境に近い環境が乾燥化によって東方に拡大してきたことは、非常に大きなアトラクティブな要素として考えていいだろう。奴隷交易の説は無理だ。

嶋田 「緑のサヘル」が終わり乾燥化しても、4世紀まではラクダはいなかった。サハラ交

易が盛んになるのは8～9世紀以後である。奴隷交易がさかんにおこなわれたとしてもそれは、その後だ。またサハラのような大砂漠を人を連れて歩いて行くことは非常に困難だ。大西洋の奴隷交易とサハラの奴隷交易の比較を少しづつは始めているがサハラを越えて連れさられた奴隷は女性が中心で、男は少ない。場合によれば嫁入りのようなつもりで喜んでついて行くこともあったと考えている。いずれにせよサハラの奴隷の量はたいしたことがない。しかもこの奴隷交易が中心になるのは、バントゥの拡大運動中心になっている所よりもはるか北の方になる。

坪内 掛谷さんの話では、内陸部が海岸といかに離れているかという印象を非常に強く持った。日野さんの話では、海岸でまさに人が混じり合い、混血し、文化が創造されている。それが内陸に向かって押し寄せていく。内陸の方はその影響を受けたかのように思っていた。だが、内陸には断固として堅い核がある。この距離の大きさに強烈な印象を受けた。

東南アジアの島嶼部を考えれば、内陸は全く無いような状態で捉えられる。その全てが日野さんの話と同じように捉えてもいいが、もっと伝統的に混じり続けていることが常態であるという印象が強い。新しい混合の発生は意外に少ないのではないかとすら思える。高谷さんの言われるマレー的な世界と、立本さんの言われたマレー的な世界が矛盾し合うよ

うにも見えるが、それらは一つの実体として存在している。混じり合った状態自体が一本で捉えられるような雰囲気があるように感じた。その中でも、ボルネオ、カリマンタンは、アフリカのミニアチュア的なものが少しはあるかもしれない。しかし、これも少し違う形で捉えた方がいいように思う。インタクトな内陸と変貌する周辺という構造において、東南アジアとアフリカとは違う考えで捉えるべきなのかもしれない。

アフリカの小人口を説明されるときに、その要因の一つにツェツェバエが出されていた。東南アジアで小人口を説明するには、ツェツェバエの分布もなく、せいぜいマラリアが一番大きな要因として出せるぐらいだろう。それにしても、アフリカのマラリアはいまでも非常に恐ろしく強いが、東南アジアのマラリアは意外に簡単に後退し、絶滅に近い形に追い込まれていったメカニズムがある。それでも東南アジアで開拓を行うときにはマラリアのないところを狙い、適地を選びながら人が広がっていく。アフリカの話ではツェツェバエの分布も関係なく広がっていた印象を受けたが、アフリカでは人が強靱にフラットに広がっていく感覚で捉えていいのだろうか。アフリカでも残された地域と選ばれた地域があり、それによって広がっていったのだろうか。

掛谷 初期のバントゥの大移動では、大きく適地を選んで広がっている。ある地域では20

世紀まで石器が連続して見られるところもある。時代を追うごとにフロンティア地域が限定されてはきただろうが、それでも18～19世紀まで広大なフロンティアが残っていた。長距離交易や奴隷交易の展開とともに地域内の人口分布の再編が進み、フロンティアの構造も錯綜していった。パッチ状に広がる人間の居住域も流動的で、フロンティアを再生産しつつつけてきたという側面もある。

日野 スワヒリ文化が入ってきた時、アフリカの内陸世界がそれに対抗する強さを持っていたと言われたと思う。強さというよりもむしろ逃げていなくなるという印象が強い。固定的なルバの王国は壊されてしまうが、逆に移動性のある集落はパッと逃げて、環境を変えた中でも適応していける。強く抵抗したのではなく、行ってみたらもう逃げて居ないというイメージが強い。